



## 馬 耳 東 風

黄金色に輝く波が微風に息づいてなびく。日本の四季は確実に巡ってくる。連綿と民族の生命を支えてきた実りの秋だ。連作が当たり前の驚異的な日本の田んぼがそこにある。稲作は水をよりどころとして栄えてきた農耕の民の文化である。考古学は、紀元前3世紀の頃に定住化した稲作農耕を土器構造から弥生文化として学説化した。「弥生式土器発掘ゆかりの地」碑が文京区弥生の言問通り脇に建立され、都心部における数少ない貝塚を伴う遺跡として史跡に指定されている。縄文式と異なる壺が根津谷に面した貝塚から発見され、地名にちなんで弥生式と名づけられた。また、この時代の農耕集落である登呂遺跡では、米作りを体験的に学習し定住生活の原点と生活の知恵を教えてくれる。「土の中に日本があった」の著者大塚初重・明大名誉教授は、登呂遺跡発掘から研究生活に打ち込み、「発掘とは、真実の歴史を知ること」との思いが戦後考古学に息を吹き込んだ。東日本で壁画を持つひたちなか市の虎塚古墳の発掘を手掛けたことでも知られる。数限りない無数の生き物が田んぼをよりどころとして生きている。水と土と空気と、そこに太陽の恵みが作り出す生き物の芸術の場が仕組まれている。春に迎えた田の神は、やがて取り入れを終えると山へかえって行く。新穀を神に奉げて収穫を感謝し、来るべき年の豊作を祈る「新嘗祭にいなめさい」は、宮中では天皇自らが、多くの農民達は産土神で祭儀を行う。現在の祝日「勤労感謝の日」の原点であり、各地で収穫感謝の行事が盛大に開催される。

皇室の祖先神を祀る伊勢神宮の遷宮をとおして、見えてくるものは太陽神アマテラスへの崇敬と伝承である。歌舞伎の坂東玉三郎と佐渡の勇壮な和太鼓奏者の鼓童とが共演し、音楽劇「アマテラス」が新たな神話の幕を開けた。イザナギからアマテラスとツクヨミ、さらに荒ぶるスサノオが生まれアマテラスと対決、漆黒の闇を憂える八百万の神達、アメノウズメの恍惚の踊りと歓声、天の岩戸が開き目もくらむ輝きとともにアマテラスが再び姿を現し、世界に光と慈しみがあふれる。まさに、生命の根源である天の恵み、太陽への感謝いひけいと畏敬こそ、人々の心の琴線に触れ、やがて絶対視観を醸成する。

伊勢神宮への民族的崇敬が、1300年にわたる遷宮の偉業へとつながる。62回目の「遷御の儀」は今月の2日と5日に治定された。かつて白洲正子は、夜のしじまの儀式をアマテラスの生まれ変わりの瞬間だと感涙の筆を取った。節ひとつない檜材で建てられた清浄かつ質素で力強い社殿は、古来建築の原型を思わせ、魂が日本の美を感じ取る。「平成の伊勢参り」が盛んに行われている。もともと、鎌倉時代以降、一般人が参宮するようになり、伊勢講も生まれ御師が旦那回りをして大麻を配布し、一層盛んになったという。江戸時代には、熱狂的なお陰参りが行われ、仁科邦男著「犬の伊勢参り」が話題になるほどで、犬の行動を「お参り」と解釈した善意の人の心の生み出した産物であったとしている。伊勢神宮の厳粛さの中に信仰と娯楽が共存し、人々の幸せな思いは今も熱く引き継がれている。

(柏)